

ある看護科教員のアタマの中

9

～精神科実習での学び方～

山岸 若菜

はじめに

看護学生は実習が大変とよく言われます。

特に3回生は一年かけて色んな領域を回って実習をします。

私の担当する精神科実習は一週間なので、14週間かけて複数の病院の病棟に毎回違う学生を連れて行っています。

教員2年目になり、少し落ち着いて実習に関われるようになってきました。

今回は精神科実習に行って感じたことについて書きたいと思います。

毎回聞く学生の戸惑い

これまで精神疾患を持つ人と関わったことがないという学生の方が多く、またドラマなどで見た精神科病棟のイメージもあって実習前はとても緊張しています。

そして実際実習が始まって毎回必ずと言ってよいほど聞くセリフが「何をしゃべったらいいかわかりません。」「何したらいいのかわかりません。」です。

身体の病気を扱う領域では、処置や観察項目が比較的明確で、学生は「やるべきこと」に従って実習を進めることができます。ところが精神科では、やるべきことが不

明確で「どう関わるか」を問われることが多いため、学生は自分の関わりに自信を持ちにくいようです。

「なんで何しゃべったらいいかわからんようになってるん？」と聞いてみるけどあまり明確な答えは返ってきません。

「精神科ではない身体の疾患を扱う科に実習に行くと、患者さんは聞いたことに答えてくれるしあれこれお話をしてくれるけど、反応が全然違うんやもん！」といらだつ学生もいます。

精神科では学生が当たり前と思っている反応が返ってこないことも多く、とても戸惑うようです。

そこで「自分が聞きたいことだけ聞きに行つてへん？自分やったらいきなり学生が来て根掘り葉掘り自分のこと聞いてきたらどう思うん？」と聞くとたいてい、それは嫌やし、しゃべりたくなくなると答えます。

じゃあどんな人やったら自分の話してもいいかなと思うかな？と考えてもらおうと恐る恐る患者さんと関係を作ろうと頑張る学生が出てきます。

嬉しい学生の変化

ある学生は患者さんのところに話に行きたいけど、何を聞いても無表情に「はい」「いいえ」しか返ってこないからどうしたらいいかわからないと悩んでいました。

私もどう対処したらいいかなんてわからないけど、とりあえず一緒に行ってみようかと、その学生と一緒に患者さんの部屋に行ってみました。

学生は「昨日はよく寝られましたか？」「朝ごはん美味しかったですか？」など話しかけていましたが患者さんは「はあ」「まあ」と返事するばかりですぐに沈黙が流れていました。

そこで私は、患者さんに自己紹介して天気の話など他愛のないことを話した後に、その患者さんが昔美容師だったという情報があったので「私最近パーマかけたんです

けど、セットがうまくいかなくて、時々爆発したまま仕事に来てるんです。何か爆発しないいい方法はないものではないでしょうか？」と聞いてみました。

すると、無表情だった患者さんが吹き出しながら「わかりません。」と答えてくれました。

この時学生はすごく驚いていましたが、あとから「笑わはるんやと思ってびっくりした。もっとあの人のことが知りたいと思った。」と教えてくれました。

学生は患者さんの表情の変化をよく見ていて、患者さんと一緒に空間を過ごす大切さを感じたのだらうと思いました。

残りの実習期間をほとんど患者さんのそばで過ごすようになり「あの人のために何か自分ができることはないかな。」と考えるようになっていました。

それなりでも実習は終わる

しかし、すべての学生がこうした気づきを得られるわけではありません。

患者さんとの関係作りをあきらめてカルテとにらめっこし、それらしいことを記録に書いて実習を終えてしまう学生もいます。

その場合記録上は整理されているように見えますが、患者さんと向き合うことでしか得られない学びは限られてしまいます。

もったいないなと思うけど、そんな様子を見ていると、精神科の実習の対象は精神疾患を持つ患者さんではありますが、実は学生が自分自身の患者さんとの向き合い方を問われる実習なのだなと感じます。

今回はカルテ上の情報整理にとどまる学びと、患者さんとの関わりから得られる学びとの差をいかに伝え、学生を「患者さんのそば」に導けるかを自分の課題として取り組んでみようと思っています。